

トップニュース



豪雨被災地・熊本を訪ねて

被災経験生かし「寄り添う」

熊本県南部を中心に甚大な被害を出した令和2年7月豪雨。熊本県では、新型コロナウイルスの影響で、ボランティアが県外から受け入れられず、復旧を妨げている。宗門内も同様に、熊本教区は教区内限定でボランティアを募り、復旧活動に取り組んでいる。この中には、「そばに寄り添ってくれる人がいる心強さを知っているから」と支援活動が続ける、熊本地震で被災した益北組(益城町、熊本市東区など)を中心とした若手僧侶らの姿もあった。

球磨川が氾濫して、30戸ほどの集落一帯が建物2階近くまで水没した球磨村神瀬の木屋角地区。水害からまもなく1カ月という8月2日、肌を焼くような午後の日差しの下、民家から茶色く染まった家財を運び出す益北組の5人の僧侶。 屋内は湿気が充満し、ダンボール箱や毛布を動かすと泥水が染み出す。 僧侶たちがそれらを益城町から乗ってきた軽トラに積み込んでいく(写真)。益城町・光宗寺住職の徳尾真龍さん(47)は手を止め、「震災で助けられた恩返しですか」とよく聞かれるが、私たちにそういう意識はない。受けたご恩はそう簡

熊本地震被災の僧侶らが復旧支援

単に返せるものじゃないから」。熊本市東区・光輪寺住職の山田敬史さん(47)は「困っている人がいて、助けたいと思うのに理由は無い。強いて言うなら、そばに寄り添ってくれる人がいる心強さを、私たちは知っているから」と言葉を継いだ。4年前の熊本地震で、光宗寺は本堂と納骨堂が半壊、光輪寺は本堂が全壊し、近隣の寺院や門徒宅も多くが被災した。避難所になった光輪寺では、大勢が肩を寄せ合って何日も心細い日を過ごし、支援物資や炊き出しの食事を分け合った。「何でうちが、と落ち込むこともあったが、毎日誰かが来てくれて、ご近所の家の手伝いも進んでしてくれた。ご門徒も住職の友達だろ。家が上がっていい」。ああ、これがつながらだ」と思ったと山田さんは言う。翌年には九州北部、次の年には広島など西日本で豪雨災害が起こった。震災の経験が役立てばと、同じ年の徳尾さんと山田さんが、益北組や地域の若手僧侶の中心となって被災地に駆けつけ、パワーステーションで土砂を掻き、広場や集会所で温かいカレーなどを振る舞った。重機の免許は、光輪寺の倒れた本堂を自分たちで解体するために取得した。2人のほかに、この4年で操縦できる人が増え、益北組チームは復旧現場で頼りにされてきた。(2・8面に豪雨関連)

本願寺新報 hongwanji journal

8月20日(木曜日)

毎月1日・10日・20日発行

発行所 本願寺新報社 京都市下京区堀川通花屋町下ル 浄土真宗本願寺派(西本願寺) 千600-8501 本願寺出版社内 電話 075(371)4171(代) / FAX075(341)7753

今回の水害でも、真つ先に八代海沿岸部の芦北町に駆けつけた。その後寸断していた国道が復旧し、支援の不足する球磨村へと足を伸ばした。木屋角地区では、知人の曹洞宗住職の依頼で、被災家屋の片付けを手伝っている。 午前はそれぞれが自坊の法務があるため、被災地向かうのは午後。西日が差し始めた頃に作業を始める日も少なくないが、徳尾さんは「できる限りのことをするだけ」と語る。

この日、同地区にある本派乗光寺の豊橋光秀住職(50)が現場を訪れ、5人の僧侶に感謝の言葉を述べた。高台にある同寺は浸水被害は免れたが、断水が続くため、豊橋住職は母の則子さん(79)と避難所に身を寄せている。週の半分ほどは寺に戻り、地域の人に支援物資を届けたり、本堂を休憩場所として開放している。

「暑い中、有り難うございます」と深々と頭を下げる豊橋住職に、徳尾さんと山田さんは「一番きついのは被災した本人。私たちも震災の後、本堂の前を向くには何年もかかった」と声をかけた。そして、「ここで何とか踏ん張れば、住職さんがあるから地域に戻りたいという人が必ず出てくる。それが、お寺の力。皆さんの故郷をなくさないために、ご門徒さんや地域の人のそばで『どきやんですか』って声をかけるのが住職の務め。被災して私たちがもそれに気づかされた」と語った。